



梅干と日本刀

祥伝社黄金文庫

完本 梅干と日本刀 日本人の知恵と独創の歴史

平成14年8月30日 第4刷発行

発行所 祥伝社

感想と理由

日本人はオリジナリティがなくモノマネ文化、というのはよく聞いた言葉だ。

だが、本書を読んで、恥じ入った。

いままで自分で考えようとすらせず、右から左に言葉を流し、「どうせ」と考えていた。

だが、本書を読んで、考え直した。

慣習や因習は確かにあるだろうが、素晴らしい文化を脈々と受け継いでいたのだ。

高温多湿で地震が多く平地に恵まれない国で、

多くの方が知恵を絞り汗を流し、今日も生き続けているのだ。

髪・肌・目が環境に適した色や質になるように、

身に付ける衣服、居住空間、食生活、あらゆるものは、

この地で生きること適したように変化してきたのだ。

それが突然に変質したのは、明治維新後の欧米文化を取り入れたときだ。

いまや水虫は国民病の勢いだが、高温多湿の国で革靴を常用しているためだ。

弥生時代の登呂遺跡の田んぼの灌漑技術は、ミリメートル単位の段差だった。

かつての風通しの良い家屋は通気性が良く、障子は保温性が高い、という実に合理的に富んでいた。

6種類の味覚を持つ、食に貪欲な日本人だからこそ、お米を炊く。

などなど・・・1冊の本を鵜呑みにするのは危険だが、

身近にあるものや、当たり前すぎて見過ごしていたもの、

知ってはいたが曖昧な知識だったもの、さまざまな「日本」を知った。

長く育まれた文化を、自国の文化のみで批判するのではなく、

人々が受け継ぐに値する合理的理由があるのだから「なぜ？」と考えてほしい。

深く考えもせず「野蛮」「下品」「理解できない」などと切り捨てないでほしい。

誰もが自分と同じ人間であり、背負う歴史と育まれた文化の中で生きている。

それを踏まえて、日本人には誇るべき文化がある、と知ってほしい。